



超越者となったおっさんは マイペースに異世界を散策する1

ALPHAPOLIS

神尾優

Kamio Yu

アルファライト文庫



主な登場人物

バーラット

SSランク冒険者。
隙あらば酒に
手を出す、困った
おっさん。

バリィ

レッグスパーティの
盗賊職。
ツツン頭の
お調子者。

ティーナ

リックの
パートナーで、
大の魔法オタク。

ニーア

明るく活発な、
ぼくっ娘妖精。
が、
隠し事は出来ない
タイプ。

レッグス

若きAランク冒険者。
バーラットを強く
尊敬している。

リリィ

バリィの妹で、
ヒロ推しな
魔道士。
虫が苦手。

リック

森の中で
ヒロと出会った、
Dランク冒険者。

ヒロ

本名・山田博。42歳。
三つの最強スキルを
与えられ、異世界に
召喚された。



第0話 はじまり

やまだひろし
山田博四十二歳独身は今、非常に困惑していた。

(はて？ ここは何処でしょうか)

博の記憶では、会社からマイカーで帰宅している途中であった筈なのに、今いるのは見渡す限り白一色の空間であった。

(どこかのテーマパークのアトラクション……いやいや、私は車で国道を走っていた筈です。テーマパークに来た覚えはありません……はっ！ まさか……私は事故を起こして死んでしまったのでしょうか？)

一瞬、脳裏を不安がよぎるが、博はすぐに気を持ち直した。
(ふむ、だとしても問題はありませんねえ。両親は既に他界してますし、独身で家族もない。今生に特に未練もありませんし……)

死んだのなら仕方がないと、博はその場でゴロンと横になった。

(このまま、お迎えが来るまでゆっくりさせてもらいますか)

眠りにつこうと目を閉じようとした時、突然辺りに声が響いた。

「なーんでおっさんがここに来るかな？」

その声に驚き、閉じかけた目を全開にした博の隣には、いつの間にか十歳くらいの金髪の子が立っていた。

「お迎え……ですか？ いや、うちは仏教だった筈なんですけど、まさか天使様のお迎えとは……」

金髪の子供を天使と勘違いした博はそう言って、恐縮しながら立ち上がる。

「いやいや、御足労をお掛けしました。では、連れて行ってもらえますか」

ニコニコと笑みを浮かべてあの世への案内を頼んでくる博を見て、少年は大きくため息をついた。

「あのねえ、おっさんはまだ死んでないよ」

「ほう、そうなんですか。では、これは夢……ですかねえ」

「それも違う。ここは異世界レイムシアの神界だ」

「へっ……異世界？ 神界？」

説明を聞き、ポカンとするおっさんに少年は苛立ちを募らせる。

「ああ、もう！ だから地球の神には、この手の話に柔軟に対応出来る十代くらいの人間を頼むって言ったのに！ なんでこんなおっさんを寄越すかな」

異世界の神であるこの少年は、自分の世界を救う為に十人程『勇者』を都合してもら

よう地球の神に頼んでいたのだが、その時に十代の若者をと注文を付けていた。

しかし、その『勇者』の中におっさんが一人紛れ込んでいたのだ。

「それはそれは、私のようなおじさんが来てしまつて申し訳ありませんでした」

苛立ちを見せた年端も行かぬ少年の姿をした神に、博は何の躊躇もなく頭を下げる。

山田博四十二歳。高卒で今の会社に入社して二十四年、未だに平社員だった。

後から入ってくる後輩が次々と自分より肩書きが上になっていく中、博はいつしか新人にすら敬語で物腰柔らかく接するようになっていた。後々、自分より上の立場になる者に悪印象を与えない為の処世術である。

そんな敬語と低姿勢が完全に染み付いてしまった博にとって、相手が子供だろうとそのスタイルで接することに何の抵抗も無い。

「はあ……いや、もういいよ」

博の低姿勢にすっかり怒気が薄れてしまった神は、投げやり気味にそう呟いた。

「そうですか、それはよかったです。しかし、異世界ですか……」

「ん？ おっさん、その手の知識があるの？」

「ええ、これでも二十歳くらいまではオタクと言われてたものです。いや、懐かしい。あの頃は全財産を漫画やアニメ、ゲームなどにつき込んでましたねえ」

懐かしさに目を細める博に、神は光明を見出す。

「へえ、じゃあ、今の状況も理解出来てる？」

「はい、大体は」

「そうなんだ、だったらさっさと説明を始めるね」

すっかり機嫌を直した神は、これ幸いと説明を開始する。

「まず、おっさんにこの世界に来てもらった理由なんだけど、最近調子に乗って好き放題やっける魔族どもを大人しくさせて欲しいんだよね」

「ほう……すると、立場的には勇者とか英雄ということですか？」

「なんだ、結構分かってるじゃん」

これならば面倒な説明を省けると、どんどん機嫌をよくする神に、博は疑問を投げかける。

「しかし、何で異世界から人を呼ぶんです？」

「うーん、それなんだけどね。僕はこの世界の創造神なんだけど……」

「なんと！ 神様でしたか！」

少年が神だという事実に驚き、博は慌てて深々と頭を下げた。

「ああ、そんな敬いはいいから……それでね、神が出来上がった自分の世界に干渉することは、一応禁忌になっているんだ」

「ほう、神様とはいえ、ままならないことがあるのですねえ」

「全くだよ……でも、他の世界の住人である君達になら力を与えても問題は無い」

「なるほど。その為の召喚ですか」

「そういうこと。いや、一時はどうなることかと思っただけど、理解が早くて助かるわ」

「いやいや、恐縮です」

「それじゃ、神の加護もちやちやつとやつちやうからね」

そう言うと神はパチンツと指を鳴らす。それと同時に博の周りに無数の白い紙が現れ、博の周りを回り始めた。

「その紙の中から三枚選んで。それがおっさんの力となるから」

「分かりました」

言うや否や、博は目の前を飛んでいた紙を三枚、無造作に摘む。

「おいおい、そんなにあっさり選んでいいのかい？ 他の子達は慎重に選んでたけど……」

「慎重に選んで、中身が分かる訳でもないでしょう。悩んで神様に余計な時間を取らせては悪いので」

「あつそ。変な気を使わせたみたいで悪いね」

言いながら再び神がパチンツと指を鳴らすと、博の手元にある三枚以外の紙が一瞬で消える。

「どれ、じゃあ、選んだ三枚を貰えるかな」

「はい、どうぞ」

博から渡された三枚の紙を見て、神は目を見張った。

「おいおい、なんてスキルだよ……無欲って怖いねえ」

「どんな力でした？」

楽しげに尋ねる博に、神は説明を始める。

「まずは、【一撃必殺】。これは一回しか使えない使い捨てのスキルだけど、発動すればどれ程の力量差がある相手でも一撃で殺せるスキルだ。次は【全魔法創造】。MPの許す限りだけど、この世界のあらゆる魔法を使え、更に新しい魔法を生み出すことが出来る。超レアスキルだよ」

「ほう！ この世界には魔法があるのですか」

「あるよ、魔法は想像力。このスキルを持つていれば全属性使えるから、想像次第で色々な魔法を生み出せるよ。試してみて。そして、最後の取得確率ほぼゼロの当たり前。」

【超越者】だよ

【超越者】？

「そう。全てを超越する力を持つ可能性を秘めたスキルだよ。レベルが上がれば上がる程、とてつもない存在になっていく」

「なんか、化け物みたいですねえ」

「はは、化け物の方が可愛いかもね」

「なんですとお!？」

驚愕する博をよそに、神は三度指をパチンツと鳴らす。

それと同時に博の足元にポツカリと穴が空き、博は驚愕の表情そのままに落ちていった。

「ちよつと待ってください~~~~~~~~!! 化け物とは一体~~~~~~~~!？」

何か叫びながら落ちて行く博を見下ろし、神は一人呟く。

「しっかし、【全魔法属性】の上位スキルである超レアの【全魔法創造】と、究極の身体強化スキル【超越者】を同時に引くとはねえ。どんな化け物になることやら……あつ！……落とす場所間違っちゃった……まっいいか」

第1話 湖に落とされて化け物に

「ノオ~~~~~~~~!!」

パツシャーン！

博は空高くから大きな湖に落とされた。

「はあ、死ぬかと思いました」

湖に仰向けに浮きながら、博は空を見上げる。

一体どれ程の高さから落ちたのか確認したのだが、当然、落ちて来た場所が見える筈はない。

(ふう……ある程度以上の高さから水に落ちると、コンクリートに落ちると同じ衝撃があると聞いたことがあります、よくも無傷で助かったものです……しかし、ここは何処なんでしょうねえ)

辺りを見渡すと、周りは緑の深い山々に囲まれ、一部分のみ湖岸が平地になっていた。(とりあえず、あそこを目指しますか)

博は唯一湖から上がれそうな平地になっている岸を目指し泳ぎ始めた。しかし、二十メートル程泳いだところで息が切れ、身体が重くなってくる。

(これはきつい！ 就職してから運動らしい運動はしてませんでしたから、体力が持ちません)

湖岸まではまだ一キロ程あり、更に博の服装は着古した背広だった。水を吸った背広は異様に重く、これでは泳ぎきれないと悟った博は、一旦泳ぐのをやめて考える。

(これは……このまま泳いでも溺れる未来しか見えません。どうしたものでしょうか……) そこまで考えて、博は神様の言葉を思い出す。

(そういえば、魔法を使えると言っていましたね。MPの許す限りとのことでしたが……M

Pはどうやって確認するのでしょうか?)

博は長い間封印してきたオタク脳をフル回転させる。

(うゝむ、MPと言えぱやはりRPGですよ。思い出されるのはあの国民的なファンタジー的なやつあたりでしょうか……え〜と、確かHPとMPは戦闘中は勝手に画面に出てましたね……フィールドにいる時は……あつ！ ステータス画面を確認するんです)

しかし、異世界とはいえ現実にステータスなんてあるんですかねえ) 半信半疑な博だったが、物は試しとばかりに「ステータス！」と高らかに叫んでみた。すると、目の前に半透明のアクリル板のような物が現れる。

名前…山田博	Lv 1	状態…正常	
HP	80 / 210	MP	3000 / 3000
体力	70	筋力	65
敏捷度	60	精神力	120
魔力	100		

〈スキル〉

【二撃必殺(使い捨て)】 【全魔法創造】 【超越者】

「おお！ 本当に出ました」

かつて捨てた筈のオタク心をくすぐられ、大いにはしゃぐ博だが、その下には巨大な影が近寄っていた。

（ん？ ……随分と暗いような気がしますね…）

何かが影を作っているのかと博は空を見上げてみるも、影を作るような雲は無く、不思議に思いながら反転して湖の中を覗いてみた。

（んっ？ 暗いというより黒いです…）

博の眼前に広がるのは、青かった湖を侵食するような黒い闇。

それに言いようのない不安を感じると同時に、博の身体が周りの水ごと闇に引きずり込まれ始めた。

（これは！ 非常にまずいのでは）

恐怖に駆られ浮上しようと必死にもがくが、博は凄まじい勢いで湖の底の闇へと吸い込まれる。

（ノオオオオ！ せっかく異世界に来たのに、こんな早く終わるなんてあんまりですううう！）

血の涙でも流しそうな程に怨念のこもった心の叫びを上げつつ、博は闇の中へ吞まれていった。

（ここは……何処でしょうか？）

気が付くと博は、暗闇の中にいた。

（随分と柔らかい地面ですね、それにこの臭い）

手を突けば手の平が埋まる程地面は柔らかく、しかも不快な湿り気がある。辺りには強烈な臭いが充満していて、博はその臭いに耐えきれず、口と鼻を手で覆い口呼吸に切り替えた。

（この臭いは！ 朝の飲み屋街周辺の道端でよく見かける、もんじゃ焼きに形容されるアレに近いです！）

アレを思い浮かべてしまい、こみ上げてくる吐き気と格闘しながら、何とか視界を確保出来ないかと思索する。

（ふむ、明かりが欲しいですねえ。明かり、明かり……確か、魔法は想像力でしたか）

神の言葉を思い出し、強烈な光を想像した。すると、頭の中にライトという言葉が浮かぶ。

「魔法といえはやっぱり英語ですね……ライト！」

四十二歳のおっさんが恥ずかしげも無く叫んだ言葉に応じるように、直径十センチ程の光の玉が頭上に現れる。

「おお、これは素晴らし……いいっ!」

ライトの光を満足げに見ていた博だったが、初めて魔法を使った感動は、周囲の異様な光景に打ち消される。魔法の光に照らされた辺りの風景はそれほどにも悍ましかった。

そこは直径五メートル程の円形の部屋だったのだが、その壁は赤黒い肉塊のような質感で波打つように蠢いていたのだ。

「これは……人工物ではありませんね。むしろ生き物……痛っ!」

突然走った沁みるような足の裏の痛みに視線を下に向けると、いつの間にか湧き出た謎の液体に靴が浸かっていた。しかも、それに触れている靴は、ジュワジュワと音を立てて溶け始めている。

（これは酸……いいえ胃液ですか! ということはやはり……）

「ここは生き物の胃の中ですか〜!」

博の悲痛の叫びが胃の中に反響する。

「おおおお! このままでは溶かされて、んーここにされてしまいます! 何とかしなくては!」

溶かされないように足踏みをしながら博は必死に考えるが、その間にも胃液の水位は徐々に上がってくる。その現状に博は苦渋の選択を迫られる。

「うぐぐぐぐ、最強の奥の手だと思っていたのですが、まさか異世界に来て三十分もしな

い内に使う羽目になるとは! しかし、背に腹はかえられません! 【一撃必殺】を使用します!」

博の宣言に答えるように、博の右手が光り出した。

「おおお! これは……!」

光り輝く右手を見て、博の脳裏に懐かしきある情景が浮かぶ。

博はニヤリと笑うと足踏みをやめ拳を構え、目の前の胃壁を見据えた。そして――

「私のこの拳が光って疼きます! 勝利を挽ぎ取れと響き渡ります!」

オタク魂を取り戻した博は、誰もいないのをいいことに、かつて熱中していたアニメの決め台詞を恥ずかしげも無く叫び出す。

「喰らえええええ! 必殺のおおおお! 『シャアアイニングナッコオオオオ!』」

叫びとともに繰り返された博の必殺の拳が、目の前の胃壁に炸裂する。

ドッゴオオオオオ!

およそパンチで出たとは思えない大音量の爆発音が響き渡り、目の前の胃壁が広範囲で弾け飛ぶ。

「おおお! 凄いやつです! 流石……でえええええ!」

博の喜びの声は途中で悲鳴に変わる。

博の渾身の一撃は、胃壁どころか謎の巨大生物の腹を爆砕していた。結果、胃袋の中に



大量の水が流れ込んできたのである。

「だああああ！ 一難去ってまた一難ですか！ ドタバタ冒険活劇を自分で演じるのは勘弁ですうう！」

博の叫びは水の中に吞まれる。彼は複雑な水流に振り回されながら、巨大生物の腹の中から湖の水面へと流されて行った。

「ガボボボ……プッハア！」

博が水面に達し文字通り一息つくと、そのすぐに傍に、水面を荒らしながらエメラルドグリーンの巨大な蛇のような生き物が浮かび上がってきた。

「……何ですかこの生き物は……この世界にはこのような化け物がたくさんいるんですかねえ……」

荒れる水面に胸から上を出した状態で巨大生物を呆然と見つめながら、博がこの世界でのこれからの生活に不安を覚えていると、突然頭の中に声が響く。

「レイドボス、エンペラーレイクサーペントの単独討伐に成功しました」

「この声は一体……というかレイドボス！」

レイドボス——通常は複数パーティで討伐すべき高難易度のボス——と聞き、博の顔が

青ざめる。

「いきなりレイドボスの棲む湖に落とすなんて、神様は一体何を考えているんですか！」
神様に対して憤りを覚えていると、再び頭の中に声が響く。

〈レベルが上がりました〉

「おお、レベルアップですか」

博が喜んだのも束の間。

〈レベルが上がりました〉〈レベルが上がりました〉〈レベルが上がりました〉〈レベルが上がりました〉……

「……これ、いつまで続くのでしょうか？」

エンドレスで続くレベルアップの知らせに、博は若干の不安を感じた。

そしてそのまま時は経ち……

……〈レベルが上がりました〉〈レベルが上がりました〉〈レベルが上がりました〉

〈レベルが上がりました〉……

「いい加減終わってくれないでしょうか？　ここまでくると拷問ですよねえ、これ」

湖に浮かび、かれこれ十五分以上レベルアップの知らせを聞き続けさせられ、うんざりを通り過ぎて無抵抗になりながら、博はひたすらこの拷問が終わるのを待っていた。

「大体、この声は何処から聞こえてくるのでしょうか？　異世界とはいえ、頭の中に知らない声が聞こえるなど、非常識にも程があります。これが女性の笑い声や悲鳴なら思いつきりホラーですよ」

レベルアップのお知らせに精神をやられないよう独り言に集中する博に、やっと安息の時がやって来る。

……〈レベルが上がりました〉〈レベルが上がりました〉〈レベルが上がりました〉
〈レベルが上がったことにより、【超越者】の能力が発動します〉

（おっ！ やっとレベルアップが終了しましたか）

レベルアップ終了に喜ぶ博に、衝撃の能力説明が開始される。

【超越者】の能力により、レベル×1000の数値を能力値に加算します。尚、【超越者】による能力値の上昇は1パーセントから100パーセントの間で調整可能です。

(……なんですと？ レベルの1000倍の数値が能力値に加算されると聞こえたような……随分長い間レベルアップのお知らせを聞かされていましたが、一体、私は今レベルいくつなんでしよう?)

不安に駆られ、博はステータスを確認する。

名前：山田博 Lv1223 状態：正常

HP	367260	／	367260
MP	367275	／	367275
体力	120	(+122300)	筋力 110
敏捷度	95	(+122300)	(+122300)
魔力	125	(+122300)	精神力 150
			(+122300)

〈スキル〉

【全魔法創造】 【超越者】

そして同時に、それぞれのステータスが持つ意味についても、謎の声に告げられる。

〈体力は肉体強度および防御力を示し、HPの最大値に関与します。筋力は力の数値、攻撃力を、敏捷度はスピード、体捌きの早さを示します。精神力は魔法の操作性、および魔法への抵抗力を示しています。魔力は、魔法攻撃力の高さを示し、MPの最大値に関与します〉

次々と説明が頭の中に流れてきていた博だったが、その言葉はまったく耳に入っていなかった。

「なんじゃこりゃあ〜!?」

この世界でのステータスの平均を知らない博でも、この能力値の異常さは理解出来た。別の意味で。

(……このカッコ内の数値が【超越者】による能力値の加算分ですか……ということはこのカッコの前の数値が本来の能力値……)

「ありえるかー!」

博は力の限り叫んだ。

【超越者】の異常な能力値の底上げもさることながら、本来の能力値の上昇率の低さの方

がより一層博を驚かせた。

（レベルが1200以上あがっているのに何ですかこの能力値は！ 前の数値が一般的なおじさんの能力値だとすれば、今の状態はスポーツが得意なおじさんレベルじゃないんですか？ ありえないですよ！ 勇者補正とか無いんですか？ もし【超越者】が無かったら私、三日と持たずに死んでますよ）

博の推測はある意味正しかった。この世界での二十歳前後の戦闘に従事しない男性の平均能力値は100。博の本来の能力値は、レベルが1223になったにもかかわらず、その平均値に毛が生えた程度までしか上がらなかったのだ。

湖の上で、博は思いのままに悪態をつき続けた。

そして数分……悪態のレパトリーをあらかた出し尽くした博は、『まあ、【超越者】があるからよしとしますか』と気持ちをあつさりと切り替えて次なる問題へと目を向ける。

「うーんどうしましようかねえ、これ」

博の視線の先には、全長五十メートルを超すエンペラーレイクサーペントが腹に大穴を開けて浮いていた。

「ゲームだとお金やドロップアイテムになるんでしょうけど、まあ、現実はこのようですか。解体すればお金になるんでしょうか？」

博は自分が無一文であることを心配しており、出来るなら金目の物は手に入れたいと

思っていた。

「うーん、ゲームだとこれもアイテムの一つとして持ち歩けるんでしょうけど、現実でこれをポケットにしまうのは無理がありますし……魔法で何とかならないでしょうか？」

そこで博が思い浮かべたのは、某国民アニメに出てくるロボットだった。

「理想はやはりアレですね。別空間に部屋を作るなんて手もありますが、部屋で目的の物を探す手間がかかりますから、サッと取り出せた方が便利です」

そのようなことを想像しながらエンペラーレイクサーペントに手を触れると、頭の中に声が流れる。

〈【全魔法創造】により、時空間魔法を創造します——創造完了しました〉

「……今ので新しい魔法が完成したのですか？」

半信半疑のまま、触れていたエンペラーレイクサーペントに時空間魔法を使ってみる博。すると、博の眼前から巨大なその死体が一瞬で消え去った。

「おお！ 一体何処に？」

博が驚いていると、博の頭の中に文字が浮かんできた。

収納内容

- ・エンペラーレイクサーペントの死体——1

「ほほう、どこか四次元的な空間に仕舞ったということでしょうか」
博が感心していると、再び文字が浮かんでくる。

——エンペラーレイクサーペントは解体が可能です。解体しますか？——

「ほう、ほう、そんなことまでしてくれるのですか。至れり尽くせりでありがたいです。
ではイエスでお願いします」

博がお願いした瞬間、頭の中の収納一覧が一気に書き換えられる。

収納内容

- ・エンペラーレイクサーペントの核——1
- ・エンペラーレイクサーペントの牙——2
- ・エンペラーレイクサーペントの目玉——2
- ・エンペラーレイクサーペントの鱗——15842

- ・エンペラーレイクサーペントの肉——100トン
 - ・エンペラーレイクサーペントの頭蓋骨——1
- ……

膨大な量のエンペラーレイクサーペントの素材が一覧に書き込まれていく。そして最後に——

——これらのアイテムは時間停止や時間を進めることが可能ですが、どうしますか？——

更なるトンデモ機能を確認してくる。

「そんなことまで出来るのですか……では、生物なので全て時間停止でお願いします」

自分で作っておきながら、その想定外の高性能っぷりに若干引いてしまった博だったが、
収納内が腐った物で溢れる心配が無くなり、即決で時間停止をお願いします。

そして、全ての問題が解決した博は湖岸へと目を向けた。

「さて、陸を目指しますか」

気を取り直して湖岸を目指し、クロールの一かきをした博だったが——

「のおおおお！」

たった一かきで出た推進力は、博の体をサーフィンの板よろしく物凄いスピードで水面を滑らせる。

（これは一体何事です！）

バタ足をやめれば止まるのだろうか、周りの景色が線状に歪むような猛スピードの中、何が起こったのか分からない博は、そこまで考えが及ばないまま湖岸に辿り着く。しかし、その勢いは止まらず、陸地を十メートル程滑った後――

ゴンツ！

岩に頭をぶつけてやっと博は止まった。

「いたたた、頭頂部がヒリヒリします」

常人ならヒリヒリ程度で済む筈が無い激突をしながら、博は大した怪我も無く岩に掴まりながら立ち上がったのだが――

ゴシヤ！

「おお！ 今度は何ですか？」

大きな音に驚き音がした岩を掴んでいた右手を見ると、握られた状態で岩の上に置かれていた。

「はい？」

岩を掴んだ筈の右手が、いつの間にか握られている。この不思議な現象に、博が小首を傾けながら握られた手を開いてみると、小石混じりの砂がサラサラと手の中から零れ落ちた。

「はあ？」

更に不思議に思いながら手が置かれていた部分を見れば、岩のその部分が半円状に抉れていた。そんな光景に一瞬呆然とした博だったが、ある想像に至ってブンブンと首を左右に振る。

「……いやいや、そんなはずは……」

「そう言いつつ岩の別の部分を握って見たが――」

ゴシヤ！

博の右手は大した抵抗も無く岩の一部を握り取っていた。しかも握り取った岩塊は、手の中で粉々に砕け散っている。

博の頭の中で神様の言葉が思い出される。

『はは、化け物の方が可愛いかもね』

「……これは流石にまずいのではないですか」

博の頭の中に、人と握手をした瞬間、相手の手を握り潰してしまふ映像が浮かんだ。実際ありえる想像に、博の顔がみるみる青くなる。

「これは困りました。これでは迂闊に動くことも出来ない」
 必死に解決策を模索する博の脳裏に、「超越者」の能力が発動した時の説明が思い出される。

「そういえば、『超越者』の能力値は調整可能と言っていましたね。早速試してみますか」
 博はステータスを開き、『超越者』の能力を1パーセントまで下げてみた。

名前…山田博 Lv 1223 状態…正常

HP 367260 / 367260

MP 367275 / 367275

体力 120 (+1223) 筋力 110 (+1223)

敏捷度 95 (+1223) 精神力 150 (+1223)

魔力 125 (+1223)

〈スキル〉

【全魔法創造】「超越者」

〈魔法〉

時空間魔法

「HPとMPの数値は変わらないようですが、能力値は大分下がりましたね……しかし、能力値を100パーセントとか1パーセントとか、どこかで聞いたような会話ですね。その内100パーセント中の……とかやる機会があるのでしょいか？」

ひとまず能力値が下がったことへの安堵感を覚えつつ、博は1パーセントの身体能力の確認の為に再び岩へと視線を向けた。

ゴガッ！

岩を無言で殴ってみた博は、砕けないことに満面の笑みを浮かべる。

「ふう、一時はどうなるかと思いましたが、これなら不用意な事故で死人を出すことは無いでしょう。後はモンスターか何かで力加減を練習出来ればいいのですが……」

言いながら見渡すと、湖岸の先には湖に沿うように道が伸びており、その道の向こう側は鬱蒼とした森になっていた。

「なかなか雰囲気のある森ですね。ロープレなどでは、こんな森を歩けばすぐにエンカウトするんですけどねえ」

軽い口調で吹きながらのんびりと森の中に入っていく博。そうは言ってもそうそう敵に遭うことは無いだろうと高を括弧の行動だったが……この後すぐに先程の言葉通り、敵と遭遇することになるのだった。

「ぬおおおお！」

森に入って十歩も歩かぬ内に敵に遭遇した博は、森の中を爆走していた。

「まさかこんなに早く敵に遭遇するとは！ エンカウント率が高すぎます。しかも最初の敵はスライムか小動物系と相場が決まっているでしょうに、何故に最初からこんな大物に遭遇するんですか!？」

正確には最初の敵はレイドボスだったのだが、そんな事実とはつづの昔に無かったことにしている博は、現在、体長三メートルを超すゴルドンベアに追われていた。

ゴルドンベアは名前の通り全身の毛が金色の熊で、その毛先は鉄並みに硬く、この森の食物連鎖の頂点に立つ生物である。実はそのステータスは平均600と【超越者】の能力を1パーセントに下げた博の半分以下なのだが、精神は普通のおっさんである博が熊に遭遇した恐怖に勝てるわけがなかった。

「うぬぬぬ……おわっ！」

全力疾走中に木の根に足を取られて転ぶ博。

ゴルドンベアは獲物が転倒したことに喜び、掲げた両前足を博に叩きつけようとしたのだが、その攻撃が当たる前に博の破れかぶれの蹴りが飛んでくる。

絶対的な防御力を誇るゴルドンベアからすれば弱者の放つ最後の悪あがき、いつもそうしているように相手の攻撃は無視して、攻撃を続行する。ところが博の蹴りがゴルド

ンベアの胸に当たった瞬間、ゴルドンベアは今まで味わったことの無い衝撃を受け、後方に吹き飛んだ。

破れかぶれで放った蹴りで、大きな金色の熊が三メートル程吹っ飛んだのを見て、博は呆然としてしまう。

「……蹴りでは岩を砕けそうです」

〈【超越者】の能力が発動しました。【格闘術】をLV1で獲得しました〉

究極の身体強化スキルである【超越者】は、蹴りを一発放っただけで武術系スキルである【格闘術】を博に習得させた。

「ふむ、【超越者】はスキルまで覚えさせてくれるのですか」

新たな力を手に入れ調子に乗った博は、倒れているゴルドンベアに駆け寄り、渾身の拳を打ち下ろす。

ドゴッ！

元来の筋力に【格闘術】の攻撃補正が掛かった拳は、ゴルドンベアの急所を打ち抜き、あっさりと絶命させた。

「ふうー、何とか倒せました……って、力加減の練習をしなくてはいけないのに、なんで

全力で殴ってるんですか私はー！」
 当初の目的をすっかり忘れていたことに頭を抱えて後悔する博だったが、その博の願いに応えるように、森の奥からワラワラとゴールドンベアが大量に現れるのだった。

第2話 第一異世界人発見

「本当にこの森の中にあるの？」

「ああ、冒険者ギルドで銀貨五枚払って得た情報だ。間違いない」

黒いローブを纏った十五、六歳くらいの少女の放った問いに、皮鎧を着た青年が得意そうに答える。

「でも、この森にはランクBのゴールドンベアが出るって話じゃない。Dランクの私達が入っても大丈夫なのかなあ」

「心配ねえよ、ゴールドンベアなんて森の浅い所には出ないって」

ランクBとは冒険者ギルドが魔物やモンスターに付けたランクで、同ランクの冒険者三人と同等の戦闘力があるという目安になっている。

青年は心配無いと笑い飛ばしたが、実はそのゴールドンベアは彼等のすぐ近くにいた。

まあ、彼等を襲える状態ではないのだが……

ドゴツ！

突然響いた鈍い音に、二人は瞬時に戦闘態勢に入る。Dランクとはいえ、それなりの実戦を経験してきた二人である。モンスターの出る森で異様な音を聞いて瞬時に対応出来ないようでは、冒険者は務まらない。

「何？今の音」

「分からない……けど、こっちの方から聞こえたよな」

少女を庇うようにして音のした方を見据えていた青年は、抜いた剣を構えたまま、ゆつくりとそちらへと進んで行く。

そして彼等は目撃した。この森最強と言われるゴールドンベアが宙を舞うのを。

「何……あれ？」

「……ありえねえ」

ゴールドンベアを確認し、咄嗟に近くの木の下に隠れた二人。そしてその陰から覗き見た光景に二人ともが絶句する。

二人が見たのは、十匹を超すゴールドンベアに囲まれ、その中の一匹を素手で殴り飛ばすおっさんの姿だった。

「うーむ、いけませんね。これではまだ人は死んでしまいそうです。早く、人を殺さない

程度の手加減を覚えねば……」

物騒ものがさうなことを吹き、次なる獲物ねらに狙いねらいを定めるおっさんに、二人は息を呑む。

「何あれ？ ゴールデンベアって素手で倒せるものなの？」

「いやいや、普通は無理むじだろ。それよりも何だあの服。随分薄うすい生地きじのようだが……新しい防具か？」

グレーのヨレヨレの背広を新種の防具と勘違いかんちがいされていることを知らない博は、先程から次々と湧わいてくるゴールデンベアを、【超越者】の力加減の練習相手に定めてノリノリで相手していた。そして五匹目を撲殺ぼくころしたところで、ついに大物が登場する。

小物が道を開けたその後方から姿を現したのは、体長六メートルはあろうかという巨大なゴールデンベアだった。

「ほっほう……でかいですねえ」

その巨体を見て、ゴールデンベアに慣れていた博も若干及び腰になる。そんな仕草を見た巨体のゴールデンベア——ゴールデンキングベアは博が自分を恐れていると判断し、猛烈めつれつに突つっ込んで来た。

「おっ！ いきなり来ますか」

博が驚おどきながらも、熊の急所きゅうじょだと言われている鼻面に拳を打ち込んだ。しかし、ゴールデンキングベアは怯ひむことなくそのままの勢いで博に体当たりを喰くらわす。

「ノオオオオオ！」

巨大熊のぶちかましを喰らった博は、錐きりこ採みしながら宙を舞い——

ドゴーン！

派手はでに頭から着地した。

「痛いたたたたた、いやはや、車に追突おそされたような衝撃おうちですねえ」

首の骨を折おつてもおかしくない落下らくかをしながら、大したダメージもなく平然へいぜんと立ち上がる博。

そんな博が軽く頭を振ふって前を見ると、木の陰に隠れ、驚愕おどろの表情を浮かべる二人組と目が合った。

互いに視線をそらせずに硬直こうちくする。緊張きんちやうの空気きんぐうが漂たい始める中、先に口を開いたのは博だった。

「えーと……こんにちは？」

突然の異世界人との遭遇とくごうに戸惑とまってしまっただ博だったが、日本の社会人の悲しい習性で、思わず頭を下くだげて丁寧ていねいに笑顔あめさかで挨拶あいさつをしてしまう。

「えっ！ ……あの、その……こんにちは」

少女が挨拶を返し、言葉が通じたことにホッとする博。

博を見当みあたりない湖に落とした神だったが、流石さすがに意思いしの疎通そつうは出来るようにしていた。

「えー……それで貴方は……」

どちら様で？　と言いかけたものの、ゴールデンキングベアが少女達の後方から迫っているのを見て、博は慌てて立ち上がる。

「すみません。ちょっと立て込んでいますので、少々お待ちください」

丁寧（こゝろざわ）に断ってから、博はゴールデンキングベアに向かつて走り出した。

（先程は完全に力負けしてしまいましたね。仕方がありません、パーセントを上げましょう）

ゴールデンキングベアの筋力は約2500。1パーセントの博の約二倍程度の数値だったのだが、戦闘経験の無い博にはその差を正確に測る能力が無い。したがって――

【超越者】10パーセント！

力一杯そう叫び、必要以上に力を上げてしまう。

「おおおっ！　行きますよお〜」

少しばかり気が抜ける掛け声を上げた博は、向かってくるゴールデンキングベアに拳を繰り出す。

先程と同じような展開に、ゴールデンキングベアは再び相手を吹き飛ばそうと、その速度を緩（ゆる）めずに突っ込んで来る。ところが今度の攻撃は、本来の筋力110プラス12230、そこにゴールデンベアとの戦闘でレベルの上がっていた【格闘術】の修正が

加わった攻撃である。結果――

ボツ！

博の拳を受けたゴールデンキングベアの頭は見事に爆散した。

「……」

頭を失ったゴールデンキングベアの身体はその場に崩れ落ち、ゴールデンベアの群（む）れはボスが殺られたことにより我先にと逃げ出す。

しかし当の博は、自分が生み出したショックな光景に、拳を突き出した形のまま固まってしまっていた。

それを木陰（こかげ）から覗いていた青年と少女も、そのあまりにありえない攻撃を目の当たりにして固まってしまふ。

そして十数秒後――

（……はっ！　あまりの出来事に思考がフリーズしてしまいました。10パーセントはいけません……せめて5パーセントにするべきでした。【超越者】5倍！　いえ、5パーセント！　うーん、やっぱり語呂（ごりよ）が悪いですねえ）

博が不恰好（ぶがっこう）に拳を突き出した状態で【超越者】の力の発声方法を思案していると、後方から遠慮（えんりよ）がちに声がかかる。

「……あの……」

自分の世界にどっぷり浸かっていた博はその声で我に返り、少女と青年の方に向き直る。「おっと、これは失礼しました。私はひろ……ヒイロと申します。それで貴方がたはどちら様で？」

博と言いかけ、せっかくの異世界なのだからと、かつてゲームの主人公によく付けていた名前を名乗る博改めヒイロ。

この時、訝えないおっさんの博は、絶対者たるおっさんのヒイロになった。咄嗟に出た偽名にヒイロが満足げに頷いていると、少女がおずおずと口を開く。

「……あの、私はティーナといいます」

「俺はリックだ」

少女に続き青年が警戒しながら名乗ると、ヒイロは笑顔で頷く。

「それで、お二人は何故このような森の中に？」

「俺達は冒険者だ、この森にはあるクエストの為に来たんだよ」

「ほう！ 冒険者ですか」

ヒイロは冒険者という言葉に喰いついた。

（冒険者……いい響きですねえ。やはり冒険者ギルドなんかもあるんでしょうか）

その辺のことを詳しく聞きたかったが、もし一般常識レベルだった場合、不審がられる可能性があるヒイロは涙を呑んで自制した。

立ち読みサンプル はここまで

そんなうずうずとしていたヒイロに、ティーナが質問する。

「ヒイロさんは何故この森に？」

「私ですか、私は特訓の為です」

ヒイロがそう答えると二人は目を見開いた。

「特訓！ あんたにそんなの必要あるのか？」

言いながらゴールドデンベアの死体の山を指差すリック。

そんな二人にヒイロは肩を竦めた。

「いやいや、強くなる為の特訓ではないですよ。殺さない為の特訓です。もし、人間相手にあのような攻撃をしたらどうなると思いますか？」

ヒイロの返答に、二人は敵対した人を問答無用で撲殺するヒイロの姿を思い浮かべ納得する。

「そういう訳で、私は特訓を続けたいといけなので……」

「あのー！」

去ろうとするヒイロをティーナが呼び止めた。

「ヒイロさんはこの辺りでファルマ草を見かけませんでしたか？」

「ティーナ！ それは銀貨五枚で手に入れた情報だぞ、それをこんな胡散臭いおっさんに……」